

① 出典：池田喬『「嘘をつく」とはどういうことか 哲学から考える』

問一 3行記述問題です。比喩的な表現である「ガラス張りの状態」を本文の内容に従って説明します。ここでは10行目にある「自分や他人を守るために必要な場合でも、思ったことをそのまま無防備に口にする」ことで「多くの傷を負い、多くの傷を与える」（16行目）ことになるため、「馬鹿正直」（14行目）という言葉では済まされないものになるのです。設問の指示に従って文末は「生き方。」でまとめます。

問二 3行記述問題です。「まだ特別な内面性を形成し遂げる以前の状態」については29行目から述べられています。これを「率直」とも言っています。「まだ嘘をつくことのできない子ども」の状態（34行目）であり、内面を隠すことができない状態です。逆に「特別な内面性を形成し遂げている」状態ではそれができるのであり、「自分の都合が悪くなれば嘘をつく」（42行目）ことや「本当のことを言ったら周りにからかわれると分かれば嘘についてその場をしのぐ」ことによって、自分が信じていることを隠しておくことができる状態であることになります。

問三 3行記述問題です。「自分自身を見捨てる」ことについては67～76行目に説明がありますので、これを要約します。「自分のついた嘘と辯護の会う嘘を重ねること」や、その結果「自由を失い望むようにふるまえなくなっている」ことによって「自分の気持ちを押し殺し、苦しみのなかに自分を封じ込め、偽りのない人間関係を取り戻す希望も失ってしまう」といった部分を利用してまとめるといいでしよう。

問四 4行記述問題です。問題文の中心テーマである「正直」についての説明は問題文の後部で広範にわたって述べられています。まず傍線部直後の「社会がどういうところがある程度認識して」（47行目）いることで、嘘をつくことができる事が述べられています。しかし、それでも「嘘をつくのを止めようと思ふとどまり、自分が信じていることを正直に言ったり、相手とオープンに話し合うための努力」（55行目）ができ、「嘘をついてしまった時にも本当のことを話そうとする意志を失わないこと」（95行目）ともありますので、これらをまとめます。

問五 選択問題です。嘘のせいで自分自身を見捨てそうになんて、希望を失わないための方法については79行目以降の恋人との約束の例を使って述べられており、「自分の思っていることや自分が今日したなどをオープンに話すことによって「さまざまな思い込みや恐れにとらわれずに、自分に素直に、自分らしく」あることができるというのです。よって、正解はエです。アは「いかなる場合でも自分のおかした失敗を許してもらえるはず」が、イは「自分の信念を通せば関係の修復が見込める」、ウは「自分のしたことは正しいというという思い込みを捨てる」や「他人の批判を気にせず」などが本文の趣旨と異なります。

問六 選択問題です。筆者のいう「正直」については問四でまとめました。それにあたらないものは「率直」と分類されています。「率直」については29～37行目に説明があります。正解はイです。アはお母さんの努力を考えず、単に思ったことを言ったものですから「率直」に当たります。イは同僚

にはその場しのぎの事をいったのですが、自分の失敗という事実を上司に隠さずに述べたのですから「正直」の例です。ウは相手の気持ちを考えず、勝利の喜びをそのまま表したのですから「率直」の例です。エは悪かった点数を隠したことは「正直」でも「率直」でもありません。

問七 接続詞の問題。Aは「からかわれること」と「人命が危うくなること」を並べて述べている部分ですので「あるいは」がよく、Bは「自分が信じていることを隠しておくことができなくなり」を言い換え、まとめている「特別な内面性を形成し遂げている」を導いているので「つまり」がよく、Cは前後で内容が逆になっていることから「しかし」がよく、Dは本当のことを話すことと、話してみたらどうなるかの部分をつないでいるので「そして」が入ります。

問八 漢字問題です。「誠実」「立派」「賞賛」「利害」「切望」が正解です。楷書で書かれていることが大切です。なおウに関しては「称賛」も正解にしました。

問九 本文全体の内容を問う問題です。アは「嘘をつかない」とは「自分が信じていることを」「本心から発言する」ということはこの文章のテーマではありません。この文章では「正直」とはどういうことかが述べられています。イは「自分の信じていることを必ず言うこと」はこの文章でいう「率直」に当てはまるで「正直」で「尊敬される」ことは書かれていません。ウは「社会のなかでは嘘をつくことは認められている」が間違います。エはこの文章の最終段落の内容であり、これが正解です。

## 2 出典：柴崎友香『遠くまで歩く』

問一 2行記述問題です。傍線部(1)の1段落前には「記録に残ってない話、たくさんあるんだろうなあ。(略)この世で起きたことのほとんどは、記録に残ってないんだなあ。」という会話があり、その会話の内容を受けて傍線部(1)の1段落後に「今までに何人の人がこんなふうに話しながら歩いていったんだろう、とヤマネは考えていた。話した声はそのときのその場で消えて、大半は録音も記録もされていないくて、誰かの記憶には残っているかもしれないが、それもまたそれほど長い時間残るわけではない。」というヤマネの考えが書かれています。この5人の会話を録音などで記録しているという記述はありませんので、傍線部(1)の「五人の声は～空気に拡散していった」は、5人の会話も「この世で起きたことのほとんど」や「今までに～こんなふうに話しながら歩い」た人たちと同じように、記憶には一定時間残っても、記録には残らない、その場で消えてしまうものであることを説明すると正解です。

問二 4行記述問題です。大半が地の文で七坂の話が書かれており、途中にヤマネの考えも混ざりますので、その点に注意しながら七坂のロケ地探しに関する話がどこまで続いているのかを見極める必要があります。七坂はロケ地探しで訪れた家のことについて詳しく語っていますが、問題で問われている「最も強く感じたこと」は七坂の話の結論として述べられているはずです。七坂の話をみると、最後に「そういうことをなにかの形で手伝うようなことがしたいんですけどね。」とあります。これを七坂は「誰かが作ってきたりだいじにしてきたものを、別の誰かに手渡すような。誰か

が待っているものを、どこかで見つけてくるような。」と言い換えていきますのでここを答えの中心とします。そして、「そういうこと」という指示語がありますので、その内容をたどって前に戻ると、「いつかどこかで、誰かにとってだいじなものになったり支えになったりすること」とあります。七坂がこのような考えに至ったのは、訪れた家を案内してくれた人から、向かいの家の娘さんが陶芸の職人になったのは家主であるおばさんの好きなものに触れて影響を受けたからかもしれないという話を聞いたからです。答えの中心に、指示語の内容、それを感じた理由となる出来事を加えると正解です。

問三 選択問題です。傍線部(3)の「山」や「登り方」という比喩表現が表している内容を考える問題です。傍線部(3)の前で、いまヤマネは「長いこと書けないままの小説」があり「自分の中ではつながっているんですが、それを小説の中でどう書くかまだつかめない感じですね。」と述べています。「山」が「小説」という取り組むべきもの、「登り方」が「小説の書き方」という実現の方法を表しています。ですので、答えはイです。アは「何もできないまま時間がたっている」、ウは「時間の感覚を失ってしまって」、エは「目の前に立ちはだかる難題があって」が誤りです。

問四 3行記述問題です。「グリフィスの手紙の一文」である「〈夜が来る。だから生き残っている者は、早く記録を作つておくべきです。〉」をヤマネが思い浮かべた理由となる出来事と、この言葉とのつながりを考えます。傍線部(4)のすぐ前で、悩みに対するヤマネの回答を受けて畠田が「えー。人生の今後も大変そうだなあ」と言っています。この前の部分にはほかの4人もそれぞれに悩みを抱えていて不安を感じていることが書かれていますが、一方でヤマネは、「彼らのような先が見通せない不安や現状への焦りからは、年を重ねた自分はそれなりに離れていると思った。」「迷っている時間や、そのうちにいつかと思っている時間は、彼らにとっては重く長いものかもしれないけれど、自分にとってはすでに重くもなく、もっとはっきりと目の前にある。」とあるように、若い4人に対してすでに若くない自分との違いを感じていることがわかります。そして、「夜」というのは1日の終わりのことですから、老い先の短さを考えたヤマネにとっては人生の終わりと重なって、グリフィスの手紙の一文を思い出したのだと考えられます。そうすると、グリフィスの手紙にある「生き残っている者は、早く記録を作つておくべきです。」というのは書こうと思っている小説といった、やろうと思っていることを早くやるのがいい、という意味だとヤマネには感じられたと考えられ、以上の2点をまとめると正解です。

問五 語句問題です。漢字で答える場合、ひらがなで答える場合、どちらでもかまいません。「井の中の I 大海を知らず」には「蛙（かわづ）」、「海のものとも II のものともつかない」には「山（やま）」、「えびで III をつる」には「鯛（たい）」、「魚心あれば IV 」には「水心（みずごころ）」がそれぞれ入ります。

問六 選択問題です。ヤマネのおかれている状況の暗喩である空の色の変化を考えます。傍線部(6)より前に、「画面の向こうに、空が見える。ガラス越しの空は、静かで晴れていた。夕暮れまでには、まだいぶ時間がある。」とあります。そして、傍線部(6)の直前には「ヤマネは白い画面に戻った。

夕暮れの時間まで、書き続けられるところまで書こう。」とあります。玉川上水沿いを5人で歩いていた時にも、ヤマネは自分の残りの人生の短さや小説を書き続けられる時間の短さを感じていました。傍線部(6)には昼を表す「明るい水色の空」が「ほんの少しづつ色をえていった」とありますから、時間に焦点が当てられているここでは、夕暮れの色に変わってきていることを表していると考えられます。いまヤマネは「夕暮れ」を小説を書くタイムリミットとして自分で設定しています。ですので、エが正解です。アは「七坂や受講生たちがそれぞれ抱えている悩みがこれから解消されていく」、イは「ヤマネと七坂や受講生たちとの関係性がこれからも少しづつ変わっていく」、ウは「ヤマネがこの先どのように小説を向き合うのかはまだ不明である」が誤りです。

問七 擬音語・擬態語等の語句問題です。Aにはコ=「うっとり」、Bにはシ=「いきいき」、Cにはエ=「ちかちか」、Dにはス=「かたかた」がそれぞれ入ります。

問八 内容一致問題です。正解はアです。イは「読者の記憶にはっきりと残ると確信している」、ウは「ヤマネと七坂と丘ノ上と湯元と辻の5人」（丘ノ上ではなく畠田）、エは「それそれがいる場所についての記録を残したいと思ったから」が誤りです。